

主の公現 1月2日(日) 分かち合い

マタイ 2-10

年が明けて、クリスマスをお祝いしてから、すでに10日ほどになる今日、教会は「主の公現」をお祝いします。「公現」と訳される祝いは歴史が古く、東方教会では、クリスマスより古い歴史があるとされます。エピファニーと言われる神秘は、本来、「現れる」、と言う意味ですが、「公現」と訳されると、つい「おおよけ」、「公式」と考えますが、東方教会では、クリスマスから、公現、主の洗礼、カナの婚宴をも含む、一連の出来事を通して、主が自らを人々の世界に現わされたことを記念するのです。本来、人の目では見ることのできない神が、見える形でご自分を示されたということです。わたしたちが属する西方教会では、幼児の誕生(クリスマス)と区別して、「公現」を祝うようになった。

今読まれたマタイの福音は、東方から星に導かれてやってきた占星術の学者と、ユダヤ人の王として、当時君臨していたヘロデ大王を対比して描いています。天体観測を生業とする学者(マギ)が、突然現れた不思議な星に、神からのメッセージを読み取り、はるばるユダヤの町エルサレムへ、贈り物を携え、礼拝にやってくるのです。他方、自らの地位と権力保持のためには、何もいとわぬヘロデは、自分に代わる「ユダヤ人の王」の誕生を耳にし、自らの保身のために、幼児の誕生の場所を確認した上、2歳以下の男の子を皆殺しにする暴挙に出ました。

どちらも、「ユダヤ人の王の誕生」、あるいは「神が人となる」という未曾有の出来事に対して、人間が取りうる対照的な態度を表しています。富と地位と権力を一手に握る者にとって、「王の誕生」は、自己の安全を脅かすもの、そのものです。他方、ひたむきな心で、日々を生き、同時に、どこかで、自分を越えた大きな力、この世界を治める知恵、人間の世界の様々な闇を追い払う光を求めるものにとって、それは、まさに救いそのものでした。

人間の中には、こうした二つの心が潜んでいます。どちらに身を任せるか、それは、まさに、その人次第です。光は輝いています。しかし、イザヤの預言が語るように、「闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる」のです。闇の中に輝く光を見るためには、求める心、飢えた心、貧しい心が必要です。へりくだって、自分の小ささ、弱さ、貧しさを認める人に、光は自らを現わされます。自分が光であるかのように、何も求めず、満ち足りている人、自分が何者かであり、それを守ることにのみ関心を示す者に、闇に輝く小さな光は目にとまりません。

今の時代、人間社会はあまりに多くのものに囲まれ、豊かさと快適さ、スピードと威力に魅了され、小さなもの、貧しいことへの感覚を失っています。それは、人工的な光に感覚が麻痺し、自然の光、真の光に対するあこがれを失った時代、同時に、闇に対する感覚を失った時代と言えるかもしれません。

コロナという、人類がかつて体験したことのないような、世界規模の災禍は、いわば、真の光に対する感覚を失った人類に対して、自らの闇に気づかせ、真の光への憧憬を回復させるための摂理的な出来事だったと言えるかもしれません。光を認めるためには、自らを光に開くほかに道

はありません。光に照らされて、人ははじめて自らの闇を知り、同時に、光るものとなることができます。 「闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる」。これは、紀元前6世紀、バビロン捕囚から解放されて、祖国復帰が叶い、国を再建し始めながら、様々な障害、困難に直面していたイスラエルに向けられた言葉です。しかし、それは同時に、コロナ禍によって、再三、失意と落胆に見舞われた人類が今、置かれている状況に酷似しているとも言えます。主は、そうした民に希望の光を注がれます。新しい時代の夜明けを告げます。預言者は叫びます、「エルサレムよ、起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く」と。

わたしたちは、主が注がれた光に照らされる恵みのうちに生きています。たとえ小さな光でも、真の光に照らされた光であるならば、人々に光をもたらす光になることができます。闇の中にある、と自覚し、光を求めている人に、光をもたらすものとなりましょう。光そのものである方が、いつも、共にいてくださる方であることを信じ、勇気をもって、歩き始めましょう。(S.T.)